

翌朝はまずバスターミナルに向かった。朝の9時から発売されるといふ康定行きバスチケットを買うためだ。

相変わらず鳥葬の事も気にはなっていたが、昨日は昼過ぎに訪れて売り切れだと言われたチケットを、今日こそ確実に手に入れたかったので背に腹はかえられない。一度は諦めてしまった事で鳥葬への熱意が多少そがれていた事もあり、まずはチケットを手に入れる事を優先したのだ。

ほぼ発売開始と同時に窓口で購入を済ませ、無事に明朝発のチケットは手に入れたが、これが帰路に向かうバスの切符かと思うと私の気持ちは弾まなかった。ああ～、このままずっと、まだ訪れた事の無い土地に向かって旅が続けられたらいいのに……。なお未練がましく壁に描かれたバスの路線図を眺めていると、やはりバスのチケットを買い求めにきたらしい昨夜の大阪のおじさんに出会った。

この後はどちらへ……？ お互いの旅の予定を尋ね合い、今後更に奥地へ向かおうとするおじさんを羨みながら、軽く会話してバスターミナルを後にした。

おじさんには私がこれから鳥葬場に向かおうとしている事は告げなかった。昨夜の旅談義でも話さなかった。私が口に出せば勿論二人とも興味を惹かれ、是非一緒に見に行こうという話になるだろうとは思ったが、自分が鳥葬を見たいと願う事にもどこか後ろめたさを感じていた私には、それは旅行者同士が誘い合って見に行ったりしてはならないものの様に思われていたからだ。

バスターミナルを出ると向かいの道路でタクシーを拾った。歩いて行かれる場所にタクシーを使うのは、貧乏旅行者としては贅沢で勿体無くも思われたが、もし万が一、今日鳥葬が行われていたら……と考えると、だいぶ時間がおしている。ところがタクシーの運転手に「鳥葬場まで行って」と告げると、運転手はギョツとしたような顔をして激しくカブリを振った。「嫌だ！ あそこへは行きたくない」ちょっと意外な気がした……

チベットの人々の死生観において、人の生命で重要とされるのは魂のみ。肉体は単なる魂の入れ物という感覚なのだそう。それゆえ魂の抜けてしまった身体は既に意味を失っている物と見なされ、遺体を切り刻み鳥に施してしまう行為も自然の事として行われる……。そんな話をどこかで聞いていた事と、稻城で出会ったリー・ルー・ハイの「あそこは美しい場所だから今度遊びに行こう」などという言葉から、チベット族の人々には鳥葬場に対する禁忌感のようなものは存在しないのかと思えていた。だが、こ

のタクシー運転手の様子は明らかにその場に訪れる事を恐れていた。

「判ったわ。鳥葬場まで行かなくてもいい。少し手前でもかまわないから行って」

他のタクシーを拾う手間をかけるのも面倒だった私は、運転手にそう告げるとタクシーに乗り込んだ。鳥葬場はやはり恐ろしい場所なのだろうか……。理塘で最初に出会い2度私を鳥葬場まで運んでくれたタクシー運転手は、そこに向かう事をあまり歓迎はしていないようだったが、それ程恐れている様子でもなかった。だが後から思えば彼はチベット族ではなく、中国系の人間だったようにも思われる。

昨日の子供達の事を思った。出会った時の彼等は「鳥葬場は死者の場所だから行っては行けない」と私に告げ、そこに行く事を少し恐れていた。子供達がそのように考えるのは、当然大人が子供にそう言い聞かせているからだろう。だったら昨日私が尋ねた遊牧民達はどうか？ 彼等の住まいであるテントは鳥葬場から程近く、その全体が眺め渡せる場所に立っている。もし鳥葬場が禁忌されている場所ならば、この広い草原で何故わざわざ恐れられている鳥葬場のそばに住居を構えているのだろうか？

通りすがりの旅人である私には、良くわからない事だらけだった。

それは個人的な感覚の違いなのかもしれないし、あるいは旅行者の目には入らない民族や階級、街で暮らす人間と遊牧民との間に何か隔たりの様な物が存在するのだろうか……。私がそんな事を考えているうちに、タクシーは見覚えのある街はずれの住宅街を通り過ぎ、草原の脇を通る細い道に入った。鳥葬場はもうすぐだ。小高い丘を道が迂回するように曲がっている場所まで来ると、運転手は車を止めた。

「鳥葬場はこの向こうだ。ここからは自分で行ってくれ」

私がお金を払うと、タクシーは逃げるように去って行った。車を降りた私は道を外れると目の前の丘を登り始めた。迂回している道を歩くより直接丘を登ってしまう方が早い。外は相変わらずの真っ青な空が広がり眩い光が溢れる緑の草原だが、歩き出してからスグにいつもとは何か違う気配のようなものが感じられた。その理由はスグに判った。遠くの方からほんの微かにコツコツコツ……という音が響いてくるのだ。

いったい何だろう……。丘を登るにつれて、その音は大きくなっていく。胸騒ぎがした。きっと何かが起こって



街外れの小高い場所から見た、理塘市街地の風景

いるのだ。丘を登りきって向こう側の景色が眺められる場所にたどり着いた時、私は思わず大きく息を呑み込み、ひとりでに声を上げていた。

いつもはガランとしていた鳥葬の丘の斜面が何かで覆いつくされている。鳥だ。大人がしゃがんだ程も背丈のある大きな鳥が、丘の斜面が黒く見えるほどびっしりと群がっていた。その少し離れた場所では人が屈み込むようにして何かの作業をしているのが見える。先程から辺りに響いているコツコツコツ・・・という音は、確かにそこから響いていた。

・・・!!!! 鳥葬だあ~~~~~!!!!

やはり、今日がその日だったのだ。自然に丘を下る足が速くなる。だが、もう急ぐ必要は無い。私の目の前に広がる風景の中で、その様子は一望できた。

広大な土地に跨って暮らしている民族の集合体であるチベット族の葬儀は、概ね塔葬・火葬・鳥葬・水葬・土葬の5種類に分けられるのだという。塔葬は高位の僧に対してのみ行われる特別な葬儀であり、その他の葬儀法は地域の習慣や様々な条件によって選ばれるが、標高の高いチベット高地に住むチベット人にとって、最も広く一般的なのは死後の肉体を鳥に与えて葬る鳥葬だ。

チベット文化への理解が浅い者には奇異で残酷な風習との印象を持たれがちな鳥葬だが、遺体を鳥に食べさせる行為は、多くの生命を奪い食す事によって生きてきた人間が、死後の魂が抜け出た肉体を他の生命のために布施しようという仏教的な思想が込められたものだ。日本では和訳された「鳥葬」という言葉が使われているが、宗教上の意味は魂の抜け出た遺体を「天に送り届ける」ための方法として行われており、中国語で使われている「天葬」という言葉の方がより本来の意味に近いという。

鳥葬に付される遺体は鳥葬師(天葬師)と呼ばれる専門の職人によって解体され、骨も細かく砕かれて肉に混ぜ残

らず鳥に食べさせる。故人の身体は数時間の内に跡形も残さずにその姿を消してしまい、後にはほとんど何も残らない。

鳥葬がチベット広域でごく一般的な葬儀法として定着している背景には、チベットの風土や自然条件に適合した葬儀法であることも理由にあげられる。標高が高く大きな樹木の生えない風土では、遺体を火葬する薪や水葬に十分な水量の河川は得られ難く、土葬は寒冷なチベットにおいて微生物による分解が行われ難い。火も水も使わず、後に何も残さない鳥葬は、チベットの風土において環境へ及ぼす負荷の極めて低い理に適った葬儀法だ。

死して尚、存在の痕跡を残そうとする日本の葬儀や墓地のあり方に対して、自然から与えられた肉体は役目が終わったら自然に還す・・・そんなチベットの弔いの形にはどこか強く引き付けられるものがあつた。それをこの目で実際に確かめられる機会が得られた事に、思わず大きな喜びを感じてしまう後ろめたさを押し殺しながら、私は急ぎ足で丘を下った。

鳥葬場の斜面には群れている鳥と、かがんで作業をしている鳥葬師の他にも数人の人間が丘の上に固まってそれらを見降している様子が見えた。丘の麓では昨日子供たちと覗きに行ったコンクリートの小さな建物の前にも、数人の人間が座っているのが見える。鳥葬場の向かいの丘を早足でくだって来た私にその場にたどり着くと、ここではチベット族の男達が敷物の上に車座になって談笑している様子だ。一昨日私がこの鳥葬場に始めて訪れた時に僧侶と共に鳥葬場の下見に来ていた男も混じっていた。きっと故人の遺族か友人の集まりなのだろう。

半端な時間に一人でやって来た私に男達は怪訝そうな目を向けていたが、それにはかまわず通り過ぎ、私は真直ぐに鳥葬場の丘を登り始めた。近くから見れば丘の上に数人で固まっている人間はどう見ても旅行者だ。私と同じように鳥葬を見に来たのに違いない。だけど彼等は何故今日が鳥葬の日だと判ったんだろう？

丘の斜面に群れている大きなハゲワシ達が待ちきれないという様に時折羽をバタつかせたり飛び上がったたりしながらも、大人しく事が始まるのを待ち構えている様子はちょっと異様な光景だ。鳥も犬のように「お預け」の感情が理解できるのだという事に少し驚いた。私が群れの脇を通っても、鳥たちは私になど目もくれない様子で鳥葬師がご馳走を振舞ってくれるのを待っている。

こちらに背を向けてコツコツコツ・・・と鍛冶屋のような音を立て作業している鳥葬師とハゲワシの間を通り抜け、私は丘の上にいる旅行者達の場所までたどり着いた。

彼等の殆どは中国系のように思えたが一人だけ西洋人が混じっている。近づいてみれば、一昨日私がタクシーに乗っていた時に康定までの料金を訪ねてきたキリスト青年だった。あの翌日、康定まで500元の仕事を捕まえたと言っていた運転手のお客ははっきりこのキリスト君だと思っていたが、彼はまだ理塘に居たのだ。

「ハイ！」

近づいてきた私と目が合うと、キリスト君は片手を上げ軽く挨拶した。

「鳥葬を見に着たのかい？ 俺たちもさ…、君は一人できたのか？」

「ええ」

「少し遅かったな。もう始まっているよ。今はボディを小さく切り分けているところだ。俺たちは初めから見たぜ…こんな風にナイフを使って身体を切ったんだ」

彼は手刀で自分の腕や首を切り落とす仕草をしてみせた。少し悔しかった。人の身体が切り刻まれるところが見たかった訳ではないが、儀式としての鳥葬がどのような手順で行われるのか、全てを見届けたかった。早々と情報入手して、あれ程鳥葬の事を思い続け、何度もこの場所に通っていたというのに、肝心なところでタイミングを逃してしまった事が悔やまれる。

キリスト君の説明によれば、今は鳥葬師が大きく切り分けられた身体を鳥が食べ易くするために、更に小さくしている段階なのだそうだ。絶え間無く響いているコツコツ…という音は骨を砕いている音だ。鳥葬師はこちらに背を向けて作業しているので、その場から彼の手元は良く見えなかった。私は回りこむようにして横から鳥葬師の仕事が見える位置に移動すると、あの日僧侶と遺族らしき男達が地面に打ち込んでいた杭が立っているのが見えた。

腰から下全部を覆う大きなエプロンをつけた鳥葬師は鉈をふるい、あの日私が腰掛けそうになっていたのと同じ様な石の上で、丹念に骨を砕き肉を刻む作業を続けている。既に人の形は無くしているそれは、私には動物を捌いているのと同じ光景にしか見えなかった。あたりにはほんのりと生臭い匂いが立ち込めている。ふと学生時代にアルバイトしたスーパーの精肉売り場が思い出された。

鳥葬師の仕事を見ていて感じた事は一つだけだった。やっぱり人間だって結局は自然動物と変わらない。地球上で生かされている生き物の一種でしかないんだ…。

それにしても何という光景だろう。白い雲を浮かべた真っ青な空から太陽の光が降り注ぐこの草原で、今、私の目の前で人の身体が切り刻まれ、丘を埋め尽くす無数のハゲワシ達は行儀良く食事の時間が来るのを待っている。その傍らには鳥が人をついばむ様子を見物しようと旅行



祈禱旗が立つ鳥葬場に連なる丘

者がカメラを構えて立っているのだ…それらが当たり前の事として明るい日差しの下で淡々と行われていた。いったいこれが現実の光景だろうか？

私はキリスト君の傍らに戻ると、これまでの旅の経緯などをお互い口数少なくポツリポツリと話した。どうして彼等が今日の鳥葬を知り、ここにやってくる事が出来たのか疑問だったが、彼にはそれを尋ねなかった。以前にラサの方では鳥葬を見に行く観光ツアーのようなモノが存在している話を聞いたことがある。一般的に有名な観光地とは言えない理塘でそんな事が行われているとは考えもしなかったが、きっと宿泊していた宿の人間か誰かが、同じ様に旅行者を募って連れて来たのではないかと思われた。

見物客の中には、まるで汚いものでも眺めるようにあからさまに眉をしかめ、顔を背けている女性もいる。それ程嫌なら何故ここにいるのだろうか？鳥葬の情景をカメラに収めようとさかんにシャッターを切っている者もいた。いかにも見物に来たといった態度の旅行者達に違和感を覚えたが、やはり鳥葬が見たくてやって来た自分と彼等の何処に違いがあるのだろうか。しかしその場に一緒にいることで彼等と同化した存在になりたくない様にした事と、ここまで来ていながら鳥葬師の仕事を間近でじっと眺める事には、やはり後ろめたさを感じられた私は丘を下り始めた。

先程の現地の男達が座っている場所に戻ると、私は先日出会った男に声をかけた。一見強面に見えるが男の目は優しく穏やかで、過去に親しかった友人に面影が似ていた事もあり、私は何故かこの男に根拠のない親しみのような感情を覚えていた。男は私の顔を覚えていなかったらしく不審そうにこちらを見返していたが、「一昨日あそこで会ったでしょう？」と鳥葬場を指差すと「ああ～、あの時の…」とやっと合点が入った様に笑顔で頷き、私も敷物の上に座るよう勧めてくれた。

車座に座った男達は敷物の上に食物や飲み物を並べ、目の前の丘で鳥葬が行われているのを眺めながら楽しげに談笑している。それは日本人の私が抱いているお葬式の物悲しいイメージとは程遠い、まるでピクニックのような雰囲気だった。私が敷物の上に座ると、友人に面影の似た男は「お茶を飲むか？」と私に尋ね、足りないコップを補うために、腰に刺していた刃渡り30cmはあろうかという短刀を引き抜くと、自分がラッパ飲みしていたペットボトルを逆さにしてスパッと二つに切り裂いた。底が平らな方を私に渡して別のボトルからお茶を注いでくれると、自分用にはキャップを閉めたペットボトルの尖った注ぎ口を地面に差しこんで安定させた。

すごーい・・・格好いい！まるで山賊のように、大きな刀を日常的な小道具として使いこなしている男の姿に、私が思わず見惚れていると、「良かったらこれも食べな」と敷物の上に並べられていた食べ物も勧めてくれた。

思いがけず葬式の参列者の仲間入りをさせて貰えた私は、勧められるままにお茶を飲み、美味しいのか不味いのかよく判らない味付けの食物をご馳走になって、気付けば鳥葬の様子を眺めながらの不思議なピクニックに仲間入りをしていた。男達の言葉はチベット語なので彼等の会話は全く解らなかったが、私には酷く訛ってはいるものの、かろうじて私が聞き取れる中国語も話してくれたので、ほんの少しだが会話もできた。男たちの一人が私に問いかける。

「あんたはここに何をしに来たのかい？」

「鳥葬を見に来たの・・・」

私が答えると、尋ねた男が笑い声を上げた。

「聞いたか。鳥葬を見に来たんだとよ、ハハハハ・・・」

鳥葬などわざわざ見に来る程のものでもないのに、といった雰囲気だ。その男の言葉につられて仲間の男達も苦笑している。私は不思議でたまらなかった。その場にいる誰一人として悲しそうな顔をしている人はいないし、故人を偲んでいる様子も無い。鳥葬場の方へは時折目を向ける程度で、儀式の進行状態にもさして興味が無い様子だ。彼等の言葉は解らなくても、その雰囲気から話されている会話は単なる世間話をしている様にしか見えず、鳥葬場に背を向け寝そべて寛いでいる者さえいた。いくら日本と文化が違うとはいえ、こんなお葬式ってあるのだろうか？

「あなた達はここで何をしているの？」

愚問とも思える質問を隣に座っていた友人似の男に問いかけてみると

「鳥葬が終わるのを待っているのさ」



ハゲワシの待機風景

という答えが返ってきた。

「死んだ人はあなたの家族？」

「いや、友達だよ」

良く判らない様な気もしたが、納得がいったような気もした。おそらくここにいる人間は全員故人の家族ではないのだろう。彼等の誰もが悲しげな素振りさえ見せていないことから、特に親しい友人でさえないのでは・・・？と思われた。

あくまでも私の想像だが、きっと故人を失った悲しみを偲ぶ儀式のようなものは既に終わり、魂の抜けた身体を鳥に与える作業は家族の手を離れて知人に委ねられているのではないだろうか？ここでピクニックをしている男達の役目は遺体をこの場に届け、鳥に捧げられた肉体が残らず綺麗に供された事を最後に確認する事だけなのだろうと思われた。

和やかに談笑している男達の仲間に混ぜてもらい、彼等の様子を眺めているうちに、私もいつしか自分が鳥葬場にいるという特殊な緊張から解き放たれて、のんびりした気持ちになっていた。

鳥葬場からはひときわ高く鳥たちのざわめく声が聞こえてきた。

丘の方に目を向けると、肉体を刻む作業が一段落したらしい鳥葬師が細かくした肉片を鳥たちに投げ与えているところだ。この時を待ちに待っていたハゲワシ達は猛烈な勢いで与えられた食事に群がり、突付き合い飛び上がりながら押し合いへし合い激しく肉を奪い合っている。

そんな鳥たちの様子を男達は笑いながら眺め、いつしかその状態に違和感を無くしていた私も、のんびりお茶を飲みながら男たちと鳥たちの様子を交互に見比べていた。

(続く)

写真提供：ブログyoshidaさん